胸くるしくて

三木卓

胸くるしくて

一木卓

文藝春秋

胸、くるしくて

昭和五十一年三月二十五日　第一刷

著者　三木　卓

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

印刷所　大日本印刷

製本所　和田製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Taku Miki 1976　Printed in Japan

〈目次〉

絹子と和彦　5
治療　81
胸、くるしくて　117

裝幀　粟屋　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

胸、くるしくて

三木卓作品集

絹子と和彦

不安に駆られて目をあけると夕方の空があって、真赤に灼けた鰯雲がぐんぐん拡がっていくところだった。和彦は、ランニング一枚で裸の自分の肩を抱いて立ち竦んでいて、寒い感覚につらぬかれながら、蚊の羽音を聞いていた。墓地の只中だった。赤い光があふれ、あちこちに淀んでいた。なぜここにいるのだろうか、と思った。

震えるまぶたをいったん閉じてもう一度あけた。夕焼けの光は失せていて、かわりに蚊取線香の匂いのする闇が流れていた。和彦はそのなかに横たわって、裸の脚のあいだに毛布を挟みこんでいるのだった。夢だったのだ。頭のなかはまだ、じん、と痺れていた。湿気を帯びた、さして温度の衰えていない夏の夜気がゆっくりと動いているのだった。明るみのある方へ首をまわすと鉄格子のある古びた窓から蒼く輝いている月の光が、縞になっ

た影を投げていた。

今、何時だろう？

そう思った途端、和彦はあわててはねおきた。すぐ連絡しなければならない。

起き上ってズボンをはき、踏み板を軋らせながら階段を下り、サンダルをつっかけて母屋の裏口から中にはいった。台所の板の間では女中の春枝が算盤を使いながら今日の賄いの費用の計算をしていた。その背後をすりぬけようとすると「何、こんな時間に」と面倒臭そうな声でいった。

「うん、ちょっと母さんに電話」和彦がいった。「電話？」春枝が意外そうな声でいった。「もう九時よ」

電話のあるところは、茶の間の柱時計のかかっていない方の柱だった。縁側には数人の若い男女が腰をかけたり、庭に立ったりして喋っていた。和彦はかれらを横目で見ながら、ハンガーに掛けられている円筒状の受話器をとりあげて耳にあて、ダイヤルをまわそうとした。人差指をつっこんだが指はそのまま止まった。

四角い木製の飴色の電話機が目の前にあった。女の乳房のような銀色のベルが二つ、並んでいた、見つめていると次第に意識が澄んでくるのを感じた。〈わかった。おれは寝ぼけたんだ。母さんに電話なんて〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

縁側では無遠慮な男女の会話が続いていた。だれも和彦の言動に注意を払っていない様子だった。和彦はほっと安堵しながら、すこし大きな声で「ああ、こんな時間なのか。それじゃ明日にしようっと」といって電話機の前を離れた。

縁側には盆がおかれ、麦茶のやかんと湯呑みがのっていた。その中央にはふかし芋の数本残った籠が置いてあった。その縁側を机にして身体は庭において痩せた若い男が猫背になって便箋に万年筆を動かしていた。男の横に中年の女と少女が坐っていた。和彦は、浴衣を着て黄色の帯をしめている丸顔の絹子が形のよい厚ぼったい唇を半びらきにして吸いよせられるように男の手もとをのぞきこんでいるのを見た。〈錠前屋だ。また錠前屋のやつが来ている〉和彦は微かに不愉快なものを感じながら、かれが万年筆を一心に動かしているのを見ていた。

「おい、和彦くん」サヨがいった。「お芋あるぞ。食べてかないか？」「うん」和彦はいった。すぐ手を出した。

「何してるの？　錠前屋さん」頬張りながら訊いた。「え？」かれは眼鏡を光らせながら顔をあげ、和彦の顔を見た。それからサヨと絹子を窃み見るような眼つきで見て「へ、へ」といった。かれはまた猫背になると万年筆を動かしはじめた。

「まったく呆れた人だよ」サヨが忌々しいという声の調子でいった。「あたしらの前でラ

ブ・レター書いてんだからね」「ラブ・レター？」和彦は好奇心に惹かれていった。「これ、ラブ・レターなの？」「なにも見せつけなくたっていいじゃないかね。いやらしい」サヨがまたいった。

「ああ、恋しい恋しい春枝さま」絹子が口を押えて浮々した調子でいった。そういってからわざとらしく台所の方をうかがった。今度は少女歌劇の男役のような声を出した。「ああ、ぼくのいとしい春ちゃん」「馬鹿。聞えるじゃねえか」苛々した口調で錠前屋がいった。絹子は首をちぢめた。「ちぇっ」絹子は小さな舌をちら、と見せた。「あたしにも、だれか呉んないかなあ」

「そのうち沢山くるよ」錠前屋はうつむいたままいった。「年頃になりゃ、すぐ彼氏できるよ」「年頃って」「だって絹ちゃん、あんたあれ、まだなんだろう」錠前屋はわざと顔をあげて絹子の方を見ながらいった。不意をつかれた絹子は応酬の言葉が出てこなかった。色白の頬がもえあがった。「もうすぐだよ。あたし、わかるんだ」「高等科二年だものな」錠前屋は身体をそらせてわざと大げさなジェスチュアをして絹子の身体を見た。かれはふくらみをつくった両の掌を自分の胸にあてていった。「ほう。おっぱいもずいぶんでてきた」

絹子は、そこにあった泉貨紙の雑誌を錠前屋にぶっつけ、どっと笑い声があがった。

「錠前屋、助平」絹子は口惜しそうにいった。和彦は口もとがほころびるのを感じた。絹子は本当に負けず嫌いだ。しかし、自分はそこが好きだ、と思った。かれはみんなに気づかれないようにもうひとつ、ふかし芋をとった。

「ね、錠前屋さん」絹子は今度は声音を変えていった。「あんた、そんなことすると帆足さん、怒るんじゃない？　知ってるわよ、あたし。知らないから」「そりゃ昔のはなしだよ」錠前屋はおちついていった。「三月も前に切れてる」「ああそうなの。どうだか」絹子がいった。「帆足さん、いってたよ。あたしのこと市川春代に似ているっていってくれたって。それからいっしょにロードショー見に行ったら、帰りに細腰に手をかけられて口を吸われたって」

「もっといいことしてやったよ。いわんかったかもしれないけれど」錠前屋は平然とした顔付きでいった。「絹ちゃん。あんたが知りたくなったときには何時でもおれが、ちゃあんと教えてあげるからね」「とんでもない」絹子は顔をしかめていった。「だれがあんたなんかと」「そういいなさんな」錠前屋はいった。「これでもとても親切なんでね。みんなよろこんでくれるんだよ」

「馬鹿。あんたなんか死んでしまえ」絹子はそう錠前屋を罵ると立ちあがって姿を消した。

「こどもをからかうもんじゃないわよ」サヨが襞の多いスカートを大きくまるい膝小僧と

膝小僧のあいだに挾みこんで横坐りになりながらいった。和彦はつまらなくなって、しばらく蚊取線香の赤い眼のような火を見つめていたが、立ちあがって裏口へむかった。気温がおちてきて、シャツ一枚でいることを思い出した。起きていてさびしい思いをするより、眠っている方がいい、と思った。

離室の二階へあがる階段をのぼろうとすると、だしぬけに眼かくしをされた。慣れているので声は立てなかった。背後から覆ってきた掌のひんやりした感じや指の力で、すぐに絹子だということが判ったからだ。思わず唇が綻びるのを感じた。「こら、だれだ」和彦は笑いながらいった。「悪漢め。正体をあらわせ」

絹子は返事をしなかった。彼女の掌はしっかりと和彦の目を押えていたが、やがて両手の小指だけがその仕事から外れて下へさがり、かれの鼻孔を塞ぎはじめた。「何をする」和彦は鼻声でもがいたが、絹子はそれを許さなかった。小指は鼻孔にするりとはいり鉤形にまがった。「こちょこちょ」絹子はいった。「こちょ、こちょ」

和彦はいままで知覚したことのないような深みから気味わるい感覚が呼びおこされるのを感じ、じっと身体を強ばらせたままじっとしていた。〈絹子のような姉さんがいてくれたら〉和彦はそう思った。〈あったかくて、やさしくて〉日向の埃のような髪の匂いが、闇のなかに溢れていた。絹子の左右にわけて束ねた髪は背のなかほどまであった。

和彦は首を振り、両手をあげてひんやりとした手を外した。いたずらっぽいまなざしで笑っている白い丸顔が闇に浮いていた。「ほら、やっぱり絹ちゃんだ。絹ちゃんだってすぐに判ったよ」「手が冷たいからでしょう」絹子がいった。「それもあるけど」和彦はいった。「絹ちゃんは猫みたいに足音をたてないからね。あっ、と思ったときにはそうなんだ」絹子は笑った。「猫好きよ。だって居候のくせにさ、平気な顔して、家ん中で一番風通しのいいところで昼寝なんかして」「絹ちゃんもそうなりたい？」和彦が訊いた。「そうしてるもん」絹子がいった。「お和は気にしすぎるよ。小学生のくせに」

「小学生っていったって六年だよ、もう」和彦はいった。「昔ならもう一人前だよ」「今は昔じゃないよ」絹子がいった。「よし。お和の気の弱さ、直してやるよ。ほら、あれ、また手に入ったんだ。あたしんとこ、こない？」

「あ、あれ？」和彦は笑いながらいった。「よおし」絹子はうれしくてたまらない、というように笑った。「それじゃ、これからはじめようよ」

母屋の二階の裏にあるせまい部屋が絹子の部屋だった。サンダルをつっかけて離室と母屋のあいだの細長い空を見あげると、理科の教師に教わった白鳥座のデネブが光っているのがわかった。二人は黙って息をひそめながら早足で歩き、裏口の階段を音のしないように裸足であがった。商品をしまってある倉庫室がいくつかならび、その奥の突きあたりの

金網入りのガラス窓の嵌った鋼鉄扉の部屋が絹子の部屋だった。この部屋に入ると何時もはりつめた緊張がほぐれるのだ。この丸仁衣料品店のどこにいるよりも気楽だった。それもみな、絹子のせいなのだ。

絹子は黄色い帯の結び目を見せながら窓をあけて風を入れた。カーテンがはためいた。はためくカーテンのあいだから外を覗きながら殺した声でいった。「旦那、今夜もやってるわよ」「どら」和彦も窓際にすりよっていって外をのぞいた。物干台が離室の屋根の上にしつらえてあり、その上に大砲のような形をしている空をむいた器械とじっと動かない人影があった。

「戦争前からやっていて、まだひとつも発見してないんですって、馬鹿みたい」絹子がいった。「コメットなんて見つけたって、配給が余計もらえるわけじゃなし」「でも、名前がつくんだよ。絹ちゃん」和彦はいった。「自分の名前のついたのが宇宙を飛んでることになるんだぜ」

絹子は鼻で笑い、返事をしなかった。彼女は押入れをあけ、ごそごそやっていたが、やがて新聞紙に包んだものをもってきて、かれの前においた。得意気な表情が見えた。和彦は覗きこんで頷いた。「今度はこの前より沢山あるじゃない」「うまく行ったのよ」絹子はあかるい声でいった。「だんだんレートを釣りあげてやるんだわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.